みんな　地域の中で

城（しろ）　剛吉（ごうきち）

今から５０年前、私は高校卒業後、川崎市（神奈川県）で富士通（株）に就職し、約３年間働いたが、社会福祉に強く関心を抱くようになり、地域でボランティア活動に熱中しておりました。

私が紹介された先は、障害をかかえる子どもと、その親を支援する地域訓練会（行政と親の会の協力で出来た組織）でした。公的機関（保健所、児童館、庁舎跡地など）を間借りし、親の会の運営に行政（保健所、福祉事務所、児童相談所、療育センター職員、社会福祉協議会）がサポートする形態で、いつでも母子が参加していました。週２回程度障害の程度はさまざまでその活動の中で親子が地域で生きていくことの大切さを学びました。

当時は、現在ほど福祉が地域に根づいておらず、また障害児の親たちも家から子どもを連れ出すことに躊躇した時代でもありました。

ある日のこと、たまたま電車に乗り合わせた時のこと、そ

の母親は乗客の視線が気になったのか、「私はこれが嫌なんです」と悩みを打ち明けてくれました。その時私は何も声をかけることができませんでした。「この親子が地域で生きられる様にしていかなければならない」私が決意した瞬間でした。

地域訓練会を運営する川崎ひまわり父母の会は親子への支援と親同士・家族をもまき込んだ「みんな地域の中で生きてゆこう‼」をスローガンとした地域への積極的な働きかけを中心にすえ、大きなうねりを起こしました。勿論そこに私たち多勢のボランティアの存在があったことは、言うまでもありません。

５０年経った今でも、その当時のお母さんたちから年賀状をいただく時、人との出会いの素晴しさ、大切さをあらためて実感します。中原地訓の田口さんは、当時のことを、今でも語ってくれることがある。私の言葉かけに勇気をもらったこと。寝たきりの俊クンを障害児の俊クンではなく、「電気屋の息子の俊ちゃんと、皆が思ってくれる様な世の中にしたい」と私が言ったこと、自分もそうありたいとこの母親は俊

クンと一緒に店番をしたり、町会のイベントに参加したりしたことなどなど。

先月５／２９（月）かつてのボランティア集団（立正大学児童福祉研究会）の仲間３人が新大阪駅まで会いに来てくれました。一人は車イスだった為、妻と一緒にバリアフリーの確認に２度下見をしました。大成功でした。ＪＲ西日本の方々の対応（連携）の素早さには、ここまで来たかと感動しました。その仲間達と当時の親子達に再会する為、来年、今度は私が川崎へ行くことをサプライズ発表した。

現在シルバー人材センターで活動しているが、いずれ福祉の分野で、何かお手伝いできることがあれば協力したいと考えています。

障害があろうとなかろうと「みんな地域の中で、生きられる社会に、どうすれば実現出来るかを、皆で悩み考え、ボランティア的生活があたり前のことである様な、そんな宝塚にしてゆこうと今の私は思っています。

合掌!!